體翁百話（七十六）

國民の私産は即ち國財なり

福澤生吉

浮世の雑事家が頻りに蓄財に熱心して底止する所を知らず左れば之て其積み得たる巨萬の財産を何の爲めにするやと尋れば資は返答に困る程の次第にして冷淡に評すれば徒に苦勞するものゝ如くなれども扨は單に其人の一身に關する評論のみ眼を轉じて一國文明の進歩を眺り其事業の如き所謂國民の實力に由らざるはなし今國の人民が錦々に資産の增殖に急にして衣食既に足るも尚ほ之に安んずるを待ず百に千を足し千に萬を加へ多々ます〳〵多を欲して種々の新工風を凝らし、敏捷して土地の開墾と爲り勞働の發明と爲り運輸交通の便利と爲り資本集散の組織と爲り互に競爭を競爭する其間に最も一の必要は資本金なるが故に國民の家計上、衣食の外に餘るものあるに非ざれば日新文明の進歩は望む可らず此邊より見るときは國民の富實即ち文明開化と云ふも可なり然かのみならず文明の餘響は單に國内に止まらずして列國相對すれば國と國との間にも大に爭ふ所のものなきを得ず其利益を謀り其名譽を維持せんが爲めには常に兵力を要し其兵を養ふるの費用も亦國民衣食の外の餘財なるが故に錦々の家計に平生より其餘財はなかる可らず左れば先に一國を立て〳〵内の文明進歩を謀り外に對して發兵の勢力を振らんと欲するには國民がれの〳〵自家の生計を安くしたりとて事足る可きに非ず常に私用に餘る餘財の資本を存して始めて用を弄するを得べし然れば國の富は即ち國民の富にして國民の富は即ち國の富なり國の富は即ち國の財なり國の財は即ち國の力なり國の力は即ち國の權なり國の權は即ち國の榮なり國の榮は即ち國の安なり國の安は即ち國の樂なり國の樂は即ち國の福なり國の福